

(70)0701 気・気功の現代科学的解釈

061015 締め切り 061006 提出

外気功は非科学的

10年ほど前、正確にはオウム的事件があった年ですから1995年に、当時東京女子医科大学腎臓病総合医療センター外科で一緒に仕事をしていた医師が気功師を連れてきたことがきっかけとなって、外気功の医療への応用に興味を持ち、今では自分自身が気功師になってしまったことをこれまでも何回か紹介しました。気功から始まって、補完・代替医療全体に興味を持つようになり、最近では、医療を広い視野から見る統合医療にまで学問的な関心を持つようになっていきます。

その中で、現代日本において普通に行われている医学・医療と補完・代替医療、あるいはそれらをすべて包括的に見る統合医療までを眺め渡したとき、最も重要なキーコンセプトは、科学的と非科学的であると考えられま

す。

現代医療は、近代科学に基づいた科学的医療であるといわれます。ときには、科学技術至上主義的医療とも呼ばれ、ときに人間性の欠如と謗られることもあります。この文脈では、現代医療が科学的医療であるのに対して、多くの補完・代替医療は非科学的と呼ばれることになります。わたしは、気功に対して他の補完・代替医療とはやや異なるものがあると感じています。それは、例えば、補完・代替医療として世界的にも最も広く応用されているものの一つである鍼灸は、経穴・経絡の考えに触れないことにすると、現象的には、皮膚・皮下組織内のある種の組織・器官に対する物理的刺激によって引き起こされて効果を発現すると考えることができます。それは、現代科学的医学で理解可能な範囲内にあるといえます。指圧・マッサージもこれに類すると考えられます。あるいはアロマテラピーは、嗅覚を通じての刺激とすれば、現代科学的医学

の理解範囲内にあると考えられます。

一方、気功については、手をかざすことによって手掌の何処から・何がでて、患者の組織の何に作用し、どのような連絡経路を通じて患者に肉体的・精神的作用を及ぼし、さらに反応を起こさせるのかは、まったく現代科学的理解を超えるものといえます。その意味では、非科学的です。1972年アメリカ大統領ニクソンが中国を訪れた際に、随行者が鍼麻醉で虫垂炎の手術を受けたことに誘発されて中国古来の鍼灸・気功などが西欧世界から興味を持たれるようになり、現代科学的検討が行われた時代がありました。しかし、結局、たいした成果が得られず、科学的には訳が分からないまま現在に至っています。

日本では、第二次世界大戦後、宗教・霊性・オカルトをどう取り扱うかについては腰が引けて公の場で正面から取り扱うことができなくなっていますが、米国では、国立補完・代替医療センターの報告によると、2002年に最も

人 気 の あ っ た 補 完 ・ 代 替 医 療 は ， 祈 り で あ っ た と さ れ て い ま す 。 宗 教 的 行 為 の う ち ， 唱 え る こ と な ど は 聴 覚 的 刺 激 に な る か も し れ ま せ ン 。 し か し ， 声 に 出 さ ず に 手 を 合 わ せ て 祈 る と か ， 宗 教 的 雰 囲 気 の 話 に な る と 科 学 的 理 解 を 越 え て し ま い ま す 。

科 学 は 、 数 学 で 表 現 で き な い も の を 排 除

大 体 ， わ れ わ れ は 簡 単 に ” 科 学 的 に 考 え て ” と か い い ま す が ， 科 学 的 に と は ど ん な こ と で し ょ う か 。

科 学 的 で あ る こ と の 要 件 と し て 、 普 通 挙 げ ら れ て い る の は ， 1) 客 観 性 が あ る こ と ， 2) 普 遍 性 が あ る こ と ， 3) 再 現 性 が あ る こ と ， あ る い は ， こ れ ら に 加 え て ， 4) 一 貫 し た 論 理 性 が あ る こ と ， で し ょ う 。

別 の い い 方 と し て ， 1) 実 験 や 観 察 を す る こ と ， 2) 抽 象 的 な 理 論 が あ る こ と ， 3) 数 学 を 使 っ て 法 則 を 表 す こ と ， も あ り ま す ¹⁾ 。

科 学 と 数 学 に つ い て ， 数 学 者 ・ 哲 学 者 の

ベルグソン(1859 - 1941)は、「近代科学は数学の娘である。科学の成功は、数学の利用によって達成されたが。。。、何かの経験をするときに心身の領域で起こっている内面的経験を切り捨て、無視することによって初めて近代科学の成功が可能。。。」²⁾といったとされます。

現代医学は近代科学を基礎として成立しているといいますが、実は、この表現も極めていい加減なことは、現代と近代を、歴史的時代として区別してみると明らかです。

科学は、先行的了解事項を詮索しない

興味深いのは、近代科学の基礎となった、現在では、古典物理学と呼ばれたりする近代物理学の祖といわれているニュートンの最大の功績は、「引力・斥力は、大きさ・形・位置・運動などと同様に、物質に備わった一時的基本性質である」としたことであるという人もいます。以後、なぜ・どうしてということの追及

が必要なくなったというのです。引力はヨーロッパにおける中世後期、地動説・天動説に代表される天体運動に興味をもたれるようになった時代に重大な学問的関心事であったのは、当然のことといえましょう。一件落ち着いたのです。でも、それでいいのという感じがしませんか。科学的なことを、哲学的に解決したという人もいます。現代でこそ、科学と哲学はまったく分かれていますが、ギリシャ・ローマ時代には、渾然一体のものだったのです。フランスでは、現在でも、若いエンジニアに哲学を学ばせると書いた新聞記事を読みました。

現代に住むわれわれは、異論はあるとしても、精神は脳を中心とする中枢神経系の作用であると、大まかに考えています。脳は目に見える物質です。最近、脳科学が進歩しているともいわれますが、精神は脳の作用によるということを示す直接的な証拠はまだないと理解しています。養老は、「精神は脳のもつ本質的機能」との考えを紹介しています³⁾。これは、

ニュートンのいう引力についての考え方と同じ
先行的了解事項は追及するに及ばないとする
考えに通ずるものといえます。

蛇足ながら、精神（心）作用を発するのは
心臓であるとする考えは洋の東西を問わずあ
ったようです。ヨーロッパでは近世に至るまで王
家では、死後心臓だけを別扱いしたという報
告もありますし、古代中国文化圏では、心臓
には心の臓の名前がつけられています。解体
新書の五臓六腑に脳がないのは、このことと
関係あるのでしょうか。

外気功は、人間に備わった機能

さて、「精神は、脳の本質的機能である」こ
とを先行的了解事項として認める文脈にした
がえば、「気功は、人間に本来備わった能力
である」ことも先行的了解事項として認めるこ
とを拒否する正当な根拠はないように考えら
れます。現代では、気功は、ごく限られた人に
に付与された能力であるように見えますが、

「強弱の差はあってもすべての人に気功の能力はあるが、本人はそのことを知らない」と巷ではいわれており、人間一般に共通する能力である可能性があります。自分に外気功の能力があるかどうかとって他人の側頭部に手をかざす行為をするのは、世間的に見れば可笑しい人の部類に属するでしょうし、可笑しな人と呼ばれるよりは、普通な人でありたいのは多くの人間の通性でしょう。

現代科学の考え方にしたがえば、「気功は人間に共通の能力」とするのを現代科学的解釈としても、誤りがないのではないのでしょうか。

結局、「科学というものは、科学者社会によって承認され、社会もまたそれを真に受けている約束事だが、真理であるかどうかは分からない。その意味で、科学はある程度先進国の普通の教育を受けた人が信じている文化と伝統のようなもので、いつ恣意的に変わるか分からない」⁴⁾ということなのでしょう。

参 考 文 献

- 1) 伊勢田哲治：疑似科学と科学の哲学、
p23、名古屋大学出版会、名古屋、2003
年。
- 2) 湯浅泰雄：時空統合と心身統合の関係。
意識が拓く時空の科学（猪俣修二ら編）；
p117、徳間書店、東京、2000年。
- 3) 養老孟司：日本人の身体観の歴史、
p87、法蔵館、京都、1996。
- 4) 池田清彦：さよならダーウィニズム。講談社
選書メチエ120，p231，講談社，東京，
1997。

挿 絵：

ミノルカ島の遠いカーサ。地中海に浮かぶスペイン領ミノルカ島は、昔の海賊時代の名残か、ヨットが盛んです。白い壁・赤レンガの屋根の家々が遠くから目立ちます。